

2014年05月15日 06時13分29秒

テーマ：読書



人生について、思いを巡らすべく、柄にもなく、しばらく仏教詩人の坂村真民さんの詩や随筆を読んでいた。しかし、いつもいつも、坂村真民さんでは、失礼ですが、チョット飽きも来て、気分転換、ユーモア小説でも読みたいとおもいました。

アマゾンでチェックしてみたら、獅子文六の<くてんやわんや>が見つかり、読んでみました。文六、と言うペンネームは文豪(文五)以上だと言う洒落だそ

うですが、昔の漫才師の〈獅子てんや、瀬戸わんや〉がこの作品から名前をもらったと聞いたことがあります。

「トンでもハッポン」（とんでもないと英語の happen を結びつけた語で、とんでもない、を強めた語）や「いかれポンチ」（しっかりした考えのない軽薄な男の意味）と言う語も獅子文六の造った言葉だそうです。若い方は、こういう古い流行語はご存じないでしょうね。

今〈花子とアン〉が人気ですが、NHK の朝のテレビ小説の第一回目の作品〈娘と私〉と言うのがあって、母方の祖母が熱心に見ていましたが、この原作者が獅子文六でした。北沢彪、加藤道子のお二人が夫婦役だったのを私も覚えていますが、私が中学生の頃ですから、もう半世紀も昔です。

〈てんやわんや〉に続いて〈コーヒーと恋愛〉獅子文六の二つの小説を読みました。どちらも、最近、ちくま文庫から新しく発刊されています。取り立てて大波乱の筋立てではなく、時間がゆったり過ぎる感じですが、登場人物の会話がしゃれています。二つの小説を読んで、さらにネットの通販で古本の全集を数冊手に入れて、何度も映画化された〈自由学校〉を読み終えて、今は〈大番〉と言う小説を読んでいます。自分が育った時代のことが小説の時代背景になっていて、昔の小説もなかなか興味深いです。獅子文六さんは、岸田國

士、久保田万太郎と劇団文学座を作って演劇活動をされ、文化勲章も受賞されています。昔は大流行作家だったけど読まれない作家と言うと、若い方はご存じないでしょうけど、源氏鶏太、石坂洋次郎なんかもそうですね。こういう方々の小説も機会があったら読んでみようかなと思います。
